

音楽科授業におけるアクティブ・ラーニング研究 —学習者がより主体的・協働的に取り組める授業をめざして—

A study on the effects of active learning in music department classes
—To provide a learning class where learners can study positively and corporately—

宮本 憲二
MIYAMOTO Kenji

[要約]

本研究の目的は、中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽の授業において、生徒たちがこれまで以上に主体的に意欲をもって取り組めるようにするにはどのようにしたらよいかを学習者の側面を中心に考察するものである。研究内容として、アクティブ・ラーニングの捉え、学習者が求めるアクティブな音楽科授業の内容とは一体どのようなものか、学習者が意欲をもって主体的・協働的に学ぶ授業の構築に向け、指導者はどのような計画や方法等によりこれらの実現に向かうことが効果的かを論じたものである。研究方法は、音楽科教員を目指し、音楽科教育法を履修している学生を対象として、模擬授業における題材、発問、教材、教具等の検証を軸に考察を進めた。その結果、学習者は、教師主導型の授業よりも、能動的に取り組めるような内容の授業を多く望んでいるのではないかとということが推察できること、計画・実行・評価・改善といった有機的な流れを意識した授業構築が、これまで以上に重要であること、アクティブ・ラーニングを全く新しいものとして捉えるのではなく、これまでの実践や事例を礎として、生徒の主体的・協働的な学習をさらに高めるための計画作成、これに伴う学習形態、教材、教具、発問等の吟味、検討、深化が、より一層指導者に求められること等が明らかとなった。

キーワード：

アクティブ・ラーニング、楽しさ、見直し

[Abstract]

The purpose of this study is to consider how faculties should help learners develop and maintain motivation for study more positively than before on teaching music in junior high schools and high schools. This study focuses on the lessons for learners, who want to be music teachers. It is discussed in this study what the active learning in music lessons learners want to know is like and what kinds of plans or methods leaders should take to carry out more effective lessons where learners are positively and corporately willing to study how to compose music classes. We study how we should do in the music lessons for learners who take lessons of “guidance for music education” and want to be teachers in music by considering what kind of subjects, educational materials and educational tools should be taken and how we should ask questions on lessons of

students. The results of this study make it clear that learners appear to want to take lessons where they engage in the subjects positively better than ones where they do passively, that it is more important than before to build lessons considering the organically coordinated cycle of Plan-Do-Check-Act, and that leaders are requested to investigate minutely, examine closely, and deepen such plans, styles of study, educational materials, educational tools, and inquiring methods as improve the active and corporate ability of learners.

Keywords:

Active-Learning, Enjoyment, Reviewing.

1. はじめに

平成 24 年 8 月、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」で、アクティブ・ラーニングの必要性が示され、次いで平成 26 年 11 月、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」で、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」（＝アクティブ・ラーニング）が推奨されてからというもの、アクティブ・ラーニングを冠した書籍が書店の教育書コーナーに増えたり、雑誌やテレビでアクティブ・ラーニングの特集が組まれたりと、いささか熱に浮かされたような感があった。そして、平成 28 年 8 月、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（審議のまとめ）として、「『主体的・対話的で深い学び』」、すなわち『アクティブ・ラーニング』の視点からの学び」という表現が現われた。学校現場の教員は、制度改革や法令改正等、時どきの事象に翻弄され、時勢で求められる内容を授業に移さなければならないと試行錯誤するうちに迷走し、生徒の思いと教員の思いが乖離した授業が無かったとは言い難く、1989 年改訂の学習指導要領で「即興的な表現や創作」が明示された時には、ひらめきや奇抜な発想に重きを置いているかのような授業を見たり、1998 年改訂で中学校に和楽器指導必修が示された時には、単に和楽器に触れただけで、生徒たちに具体的に何を学ばせたいのかが釈然とせず終結を迎える授業が散見されたりもした。

ところで、日本音楽教育学会が 2015 年 5 月～7 月にかけて、小・中・高校生を対象に、「音楽についてこう思う！！音楽について言いたい！！学習者アンケート」と題して、Web 調査¹⁾を実施した。その中の〔質問項目Ⅱ（2）1：自由記述「音楽の授業について」例：「こんな授業だったらいいのに」「こんな授業で楽しい」など〕で、否定的回答として、中学生が、「僕の学校は歌ばかりで昼休みや放課後まで歌で歌の楽しさを知らない僕には音楽が嫌いになってしまいます。もっとクラスみんなが歌の楽しさを知ってからみんなで楽しく歌いたいと思います」²⁾、「ぼくは音楽が大好きです。でも、音楽の授業は大嫌いです。特に合唱が嫌いです。美しい声ばかりを求められるからです。美しい声ばかりが歌じゃない、むしろ世間ではそっちが少数派かもしれないというのに地声で歌うと怒られるのです。あと楽譜通りにしると強制されるのも嫌いです。では、なぜぼくは音楽が好きか。それは音楽が芸術だからです。作曲が大好きで自由に歌っています。友達と音楽ユニットを作って自由に歌っています。自分の言いたいことを表現したりできるからです。音

楽の授業ってなぜこんななのだろうと、と疑問に思う日々なのです」³⁾と書いている。これを中学生の独り言や単なるつぶやきと捉える人は少ないだろう。音楽教育に携わる人のみならず、多くの人が頷ける点もあり、ひじょうに考えさせられる内容である。ここに挙げた中学生の思いや願いとアクティブ・ラーニングとが重なって見えてくるのは筆者だけだろうか。

2. アクティブ・ラーニングの背景と捉え

アクティブ・ラーニングを捉えようとするとき、21世紀型スキルとこれからの日本の教育との大きな関わりといったものを考えずにはおられない。このことに関連して、高須一は「21世紀型スキル⁴⁾を視座とした教育は、文部科学省や教育関係者からだけではなく、経済界・産業界からも積極的に求められているところである。教育政策は、その性質から、そもそも産業界・経済界からの要請を反映する傾向にあるが、21世紀型スキルで説明がつくほど収斂性の高い影響は未曾有だろう」⁵⁾と述べている。不透明な経済動向、産業構造の変化、グローバル化、職業の多様化、少子高齢化等の課題を乗り越えるための21世紀型スキルに関する研究⁶⁾は既に始まっており、これらを遡って俯瞰しなければならないとも考えるが、ここでは、「主体的」「協働的」「授業の構築」「指導者」「計画や方法」等のワードを中心に、平成24年8月、中央教育審議会答申及び平成26年11月の文部科学大臣諮問、平成28年8月、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議のまとめから捉えてみることにした。(下線=筆者)。

「中央教育審議会答申⁷⁾」より抜粋

4. 求められる学士課程教育の質的転換（学士課程教育の質的転換）

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

「文部科学大臣諮問⁸⁾」より抜粋

新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関連して、これまでも、例えば、OECDが提唱するキー・コンピテンシーの育成に関する取組や、論理的思考力や表現力、探究心等を備えた人間育成を目指す国際バカロレアのカリキュラム、ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育（ESD）などの取組が実施されています。さらに、未曾有（みぞう）の大災害となった東日本大震災における困難を克服する中で、様々な現実的課題と関わりながら、被災地の復興と安全で安心な地域づくりを図るとともに、日本の未来を考えていこうとする新しい教育の取組も芽生えています。

これらの取組に共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。

そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。

また、こうした学習・指導方法の改革と併せて、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」に関する学習評価の在り方についても、同様の視点から改善を図る必要があると考えられます。

学習指導要領等の在り方について、検討事項の中から抜粋

- 育成すべき資質・能力を確実に育むための学習・指導方法はどうか。その際、特に、現行学習指導要領で示されている言語活動や探究的な学習活動、社会とのつながりをより意識した体験的な活動等の成果や、ICTを活用した指導の現状等を踏まえつつ、今後の「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方についてどのように考えるか。また、そうした学びを充実させていくため、学習指導要領等において学習・指導方法をどのように教育内容と関連付けて示していくべきか。
- 育成すべき資質・能力を子供たちに確実に育む観点から、学習評価の在り方についてどのような改善が必要か。その際、特に、「アクティブ・ラーニング」等のプロセスを通じて表れる子供たちの学習成果をどのような方法で把握し、評価していくことができるか。従って、クローズアップされているアクティブ・ラーニングの捉えといったものについては、校種間や教科間、また、指導者によってバラつきがあるといわざるを得ない。

「初等中等教育分科会教育課程部会 審議のまとめ⁹⁾」より抜粋

③「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）

- 第三は、「主体的・対話的で深い学び」、すなわち「アクティブ・ラーニング」の視点からの学びをいかに実現するかである。子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにするためには、子供たちが「どのように学ぶか」という学びの質が重要になる。
- 学びの質は、7. に述べるように、子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結びつけたり、多様な人との対話で考えを広げたり、各教科等で身に付けた資質・能力を様々な課題の解決に生かすよう学びを深めたりすることによって高まると考えられる。こうした「主体的・対話的で深い学び」が実現するように、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化しようとするのが、「アクティブ・ラーニング」の視点である。

- これは、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである。
- また、「カリキュラム・マネジメント」は、学校の組織力を高める観点から、学校の組織や経営の見直しにつながるものである。その意味において、今回の改訂において提起された「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」は、教育課程を軸にしながら、授業、学校の組織や経営の改善などを行うためのものであり、両者は一体として捉えてこそ学校全体の機能を強化することができる。

3. 事例研究

音楽科の学習領域（表現・鑑賞）を考えると、いずれの領域においても、「生徒による主体的な活動」や「生徒の能動的な活動」といった営みなしに深まりのある授業展開を図ることは難しいように思われる。また、これまでからも音楽科では、このような営みを大切にした取組みが行われてきたと捉える教員も多いのではないだろうか。本章では学習指導要領が告示という形をとって以降の変遷を辿り、本研究のキーワードである「アクティブ・ラーニング」と関連する中等科音楽における授業実践を考察してみることにした（表1）。「学ぶ意欲」、「自主的」「主体的」といった事柄が特に強調されはじめ、「教える側に立った授業から学ぶ側に立った授業へ」と転換がもためられた、いわゆる「新しい学力観」の時期に本研究と関連するような授業実践を多く見ることができたように思われる。数多ある中から、「課題発見、課題探求、課題解決」といったような学習形態をもち、生徒がいきいきと取り組み、自ら学びの手応えを感じていると思われるような実践を取り上げ考察した。

表1

	基本的な捉え等	キーワード	音楽科としてのトピックス等
1958～1960年 (昭和33～35年)改訂	教育課程の基準としての性格の明確化 (道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等)	系統性を重視	・小・中ともに2領域(「鑑賞」と「表現『歌唱・器楽・創作』」)で構成。 ・「鑑賞共通教材」、「歌唱共通教材」の設定。
1968～1970年 (昭和43～45年)改訂	教育内容の一層の向上(「教育内容の現代化」) (時代の進展に対応した教育内容の導入) (算数における集合の導入等)	時代に即した教育	・歌唱・器楽・創作・鑑賞の4分野に新たに「基礎」が加えられる。
1977～1978年 (昭和52～53年)改訂	ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化 (各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる)	知・徳・体の調和	・小・中・高等学校で「音楽を愛好する心情の育成」が目標として強調される。
1989年 (平成元年)改訂	社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成 (生活科の新設、道徳教育の充実)	新学力観	・「音楽に対する豊かな感性の育成」が強調。 ・「創造的な学習活動」の重視。
1998～1999年 (平成10年～11年)改訂	基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成 (教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設)	ゆとり教育	・「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性」を重視。 ・小・中学校で「鑑賞共通教材」が示されず。 ・中学校で和楽器が必修化。
2008～2009年 (平成20～21年)改訂	「生きる力」の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成のバランス (授業時数の増、指導内容の充実、小学校外国語活動の導入)	脱ゆとり教育	・小・中学校で「共通事項」の提示。 ・中学校で「歌唱共通教材」が再び提示される。

※一部改正を除く

3.1 過去の実践からの学び

考察対象の授業実践は、松村麻利氏（以下、松村）、藤池聡氏（以下、藤池）のものである¹⁰⁾。松村の実践が高等学校におけるもの、藤池の実践は中学校でのものである。

松村は、「自己確立、自己学習能力を育成する『日本の音』創作」というタイトルで、指導構想（図1）の下、実践を展開している。具体的には、三、四人で構成したグループが、ヨーロッパと日本の、ものの考え方や文化、美意識の違いなど、12のテーマに分かれ、それぞれのグループで書物を読み、具体的に調べ、音楽を選び、資料を作成して発表するという第1段階での学習を経て、創作活動に入る。ここでは、「日の出」、「四季」、「舞楽」等のサブテーマを決定し、楽器や音具の吟味、曲の構成、表現方法の探究等を行い、最後に作品発表で締めくくるといったスタイルである。松村自身「いつもながら創造的音楽学習による創作は生徒を生き生きとさせ、工夫を凝らしたユニークな作品が出来上がる。（図2）その最も大きな理由はこの学習が、活動の過程そのものに価値を認め、生徒に成就感を味わわせるからであろう¹¹⁾」と述べている。生徒たちが課題を見つけ、探究し、探究した内容を具体的で分かりやすい方法を用いて他者へ発信（発表や演奏等）し、課題解決へと向かう流れは、それぞれの活動が有機的な繋がりを持ち、生徒たちの活動がよくわかる実践となっている。

図1

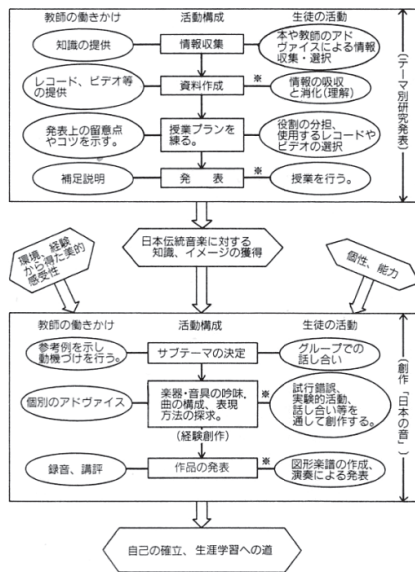


図2

大まかな図形楽譜

《舞楽》
2年生組
楽師 斎藤
白井一朗
杉田知則
平次郎
渡辺貞裕
足立由佳
伊藤幸太郎
戸部種子
橋口忍子
和賀弘恵
生徒作品の
一部抜粋。

トロンボーン
太鼓
Triangle
シンバル
カウベル
すず
タンブリン
コップ
オルガン

上の図のように演奏しました。…みんなで適当にやっていたうちにいろいろよい案が出てきたので、なんとか、まとめることができました。

* アタックは ↑ 印
は波の動き…
はタンブリンを左右に振る様子…
はオルガンの持續音を表す。

いっぽう、藤池は、歌曲「魔王」を教材として、音楽科教科内選択学習を行っている（図3）。概要は、課題の発見、課題の絞り込み、研究内容の具体化、研究活動、発表、自己評価といった流れである。グループにおける研究主題、研究内容等を藤池は表2のように示している。藤池は、ねらいについて「今回の取り組みにおいては、従来の教師主導の受け身的な活動を主とする鑑賞領域の学習から生徒たちの自主的な活動を主体とする教科内選択学習へ発想を転換し、生徒一人ひとりの課題を追求する場を多く設定する生徒各自が選択した課題を解決することによって、音楽の良さや美しさにせまっていくことをねらったのである¹²⁾」と述べている。また、学習後、9項目について、5段階による自己評価を実施し、評価結果を表3のようにまとめている。

図3

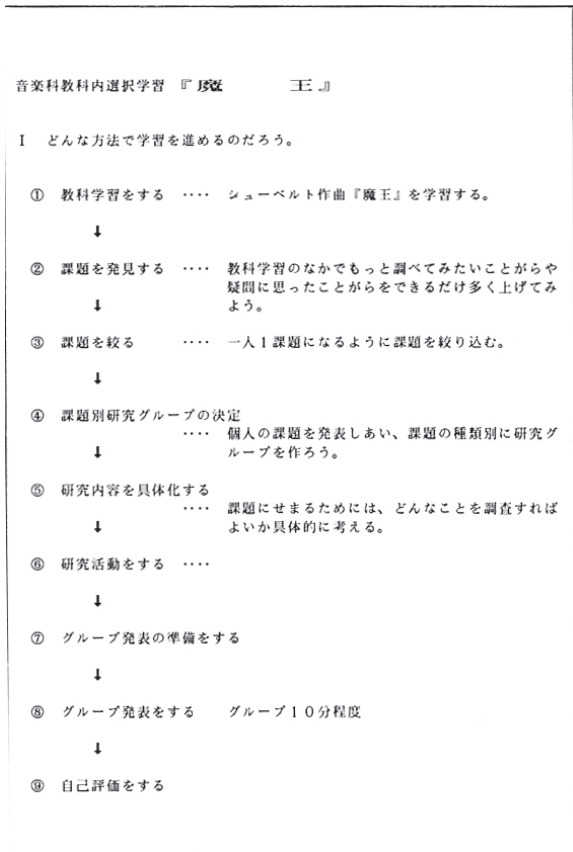


表3

	←はい 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 →				
男子	5	4	3	2	1
研究テーマの決定は良かったか	33.3%	50.0%	14.3%	2.4%	0.0%
研究計画はうまくたてられたか	11.9%	40.5%	35.7%	11.9%	0.0%
調査する時間は適当だったか	9.5%	40.5%	33.3%	7.1%	9.5%
調査する資料は豊富だったか	14.6%	36.6%	24.4%	22.0%	2.4%
調査・研究する力があったか	19.0%	47.6%	31.0%	2.4%	0.0%
研究発表する力があったか	19.0%	42.9%	35.7%	2.4%	0.0%
毎時間の学習は充実していたか	16.7%	31.0%	28.6%	19.0%	4.8%
毎時間の学習は楽しかったか	31.0%	35.7%	23.8%	7.1%	2.4%
このような学習方法はよいか	52.4%	26.2%	11.9%	4.8%	4.8%

	←はい 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 →				
女子	5	4	3	2	1
研究テーマの決定は良かったか	55.0%	43.3%	1.7%	0.0%	0.0%
研究計画はうまくたてられたか	31.7%	53.3%	15.0%	0.0%	0.0%
調査する時間は適当だったか	30.5%	37.3%	23.7%	8.5%	0.0%
調査する資料は豊富だったか	33.3%	33.3%	18.3%	15.0%	0.0%
調査・研究する力があったか	38.3%	48.3%	11.7%	1.7%	0.0%
研究発表する力があったか	20.0%	60.0%	16.7%	0.0%	3.3%
毎時間の学習は充実していたか	33.3%	43.3%	23.3%	0.0%	0.0%
毎時間の学習は楽しかったか	46.7%	40.0%	11.7%	1.7%	0.0%
このような学習方法はよいか	51.7%	35.0%	11.7%	1.7%	0.0%

表2

教科内選択学習 グループ学習計画表 1年B組
シューベルト作曲 『魔鏡 三王』

No	研究主題	グループメンバー	研究の内容	準備物
1	「魔王」の表現について	中山、西前、松野	子どもや父親の声や表現の変化 伴奏の風や馬の足音の表現について（実際の音との比較）	コンピュータ、OHP、フロッピー 「魔王」のCD
2	「魔王」の詩の4つの解釈	南、武田、中井、木郷	ゲーテの「魔王」の詩で作曲された4人の曲を聴き比べ、その曲について感じたことや、どんな情景を考えながら作ったかなどを調べる。	カセットテープ、ラジカセ
3	「魔王」の紙芝居を作る	井上、田中、西川	歌曲「魔王」のいろいろな場面を絵や文で表して紙芝居で発表する。	画用紙、絵の具、教科書、鑑賞の資料
4	ゲーテの詩を使って作曲した作曲家たち	井上、岩高、鶴飼、大久保、吉富	ゲーテの作品を調べる。ゲーテの作った詩に作曲している作曲家を調べる。	OHP、図書館の資料
5	「魔王」の劇	岸木、井上、綾、芥川、山川、森田	歌曲「魔王」の詩の内容に合わせて劇をする。 台詞だけでなく、コンピュータで効果音の工夫をする。	コンピュータ、ピアノ、「魔王」のCD
6	「魔王」のイメージの絵を描こう	奥田、青木、木谷、行村、小島、山口	「魔王」にでてくる情景を思い浮かべて絵を描く。 (例) 魔王、魔王の娘、父、子ども、馬、嵐の夜、子どもが死んだときの様子	紙、色鉛筆、絵の具、クレヨン
7	シューベルトの作品について	面條、片岡、三原、松永、小竹	有名なシューベルトの作品を5曲ぐらい決めて詳しく調べる。 他の作品についてたくさん調べてOHPシートにまとめる。	OHP、テーブルコーダー
8	「魔王」の情景を絵に表そう	大谷、尾高、坪田、山元	「魔王」の詩について 詩にそってOHPシートに紙芝居を作る 「魔王」のあらすじ	OHP、「魔王」のCD、教科書、図書館の資料、名曲の鑑賞
9	シューベルトの「魔王」を作曲したときの様子	伊藤、岡本	シューベルトが「魔王」の作曲したときのエピソードについて	コンピュータ、OHP、図書館の資料

自己評価結果をみると、評価「5」「4」の合算で、最も高かった項目は、女子では「研究テーマの決定はよかったか」の98.3%である。また、男子でも、「研究テーマの決定はよかったか」が83.3%でトップとなっている。女子で、次いで高いのは「毎時間の学習は楽しかったか」と「このような学習方法はよいか」の86.7%。3位が「調査・研究する力はついたか」の86.6%であった。いっぽう、男子で2番目に高いのが「このような学習方法はよいか」の78.6%。3位が「毎時間の学習は楽しかったか」の66.7パーセントだった。2位、3位で、男女におけるバラつきはあるものの、「研究テーマの決定はよかったか」「このような学習方法はよいか」「毎時間の学習は楽しかったか」の項目は、上位に位置しており、生徒主体の学習を進める場合、「テーマ決定」「学習の方法」「楽しい」、この3点をポイントとして、具体的な授業計画を立てる必要のあることが分かる。

ここで取り上げた2つの実践は、松村が1988年、藤池が1993年に発表のものである。この時代、既に中学校音楽科では授業時数が縮減され、生徒自らが発見し、探究し、解決していくといった生徒主体の授業スタイルを、藤池実践では教科内選択学習等で、研究したと思われる。

4. アクティブな音楽科授業のために

今回の研究テーマは「音楽科授業におけるアクティブ・ラーニング研究」であり、生徒たちがこれまで以上に主体的に意欲をもって音楽科授業に取り組めるようにするには、どのようにしたらよいかを学習者の側面を中心に考察するものであることは既に述べたが、先述の松村、藤池実践では、グループ活動を取り入れ、「発見」「探究」「解決」といったような流れを構築し授業展開していたが、ここでは、これから学校現場という実践の場で音楽の授業をしなければならない教員志望学生を対象に、教師主導型の授業とアクティブ・ラーニングを取り入れ、個々で発見・探究・解決して行くような授業の両方を筆者が行い、授業を受けた学生たちの振り返りから、どのような計画や方法等によりアクティブ・ラーニングを取り入れた授業に向かうべきかを考察することにした。

4.1 模擬授業企画及びその実際

模擬授業概要を次に示す。

- ①日 時：2017年1月16日（月）1限（9:00～10:30）
2017年1月18日（水）1限（9:00～10:30）
- ②場 所：尚美学園大学 C 422 教室
- ③対 象：音楽科教育法Ⅱ受講者（月曜1限クラス14名、水曜1限クラス9名）
- ④授業者：筆者
- ⑤学習領域：表現（歌唱）、鑑賞
- ⑥題材指導計画案（学習指導略案）：資料1-1、2-1
- ⑦教材・教具：ワークシート（資料1-2、2-2）、聴取音源、板書（資料3、掲載のものはBパターン授業の第1時、第2時）
- ⑧模擬授業考察：振り返りシート（資料4）

模擬授業にあたって、これまでの学生たちの教育実習実態等をふまえ、教育実習期間中に授業をすることの多かった中学校第1学年を対象に、一方は歌唱分野のみの内容（Aパターン／資料1-1）を、もう一方は、歌唱と鑑賞を関連させた内容（Bパターン／資料2-2）を行い、学生たちには生徒目線（発問等に対して、中学1年生ならどのような回答をするか等、考える）、授業者目線の両方から授業に参加することを指示した。授業後の考察にあたっては、振り返りシート（資料4）を活用し、模擬授業終了後に記述させ、研究協議等を行った。

また、教材については、教育実習期間中に取り組むことの多かった「夏の思い出」を取り上げ、90分授業のうちAパターン、Bパターンを、それぞれ30分に圧縮して行い、残る30分を考察に充てた。

Aパターン授業の第1時では、導入段階で、教師が本時の目標・内容等を提示し、その後、教材である「夏の思い出」の教科書準拠CDを聴取し感想等を述べさせ、歌詞内容を把握させるといった流れである。続く第2時では、作曲者、作詞者、楽譜に書かれている音楽記号等を理解させながら曲を仕上げて行くといった、従来から見られるオーソドックスなスタイルを進めた。

いっぽう、Bパターン授業の第1時では、導入段階で、本時の目標・内容等は生徒に提示せず、「これからの2時間の学習で色々なことを見付けよう」と声かけをし、「見付ける」「発見する」「深める」「解決する」といったように、生徒自身が考え、進めて行く学習であることを告げた。この後、これまでの夏休み体験や夏の過ごし方等を自由に発表させ、A（伴奏がジャズ風にアレンジされている）、B（教科書準拠CD）、C（女声三部合唱）と、タイプの異なる「夏の思い出」の鑑賞に入った。その後、3種類の聴取音源からの気付きや発見等を各自が考察し、考察内容の発表の後、「夏の思い出」の歌詞音読、主旋律の斉唱、その後、音源を聴いた時と歌唱したときの違いを見付け、発表を行い、第2時に繋げるといったスタイルのものであった。続く第2時では、「歌唱活動」「考察」「考察内容の記述」といった活動を交互に取り入れながら、探究段階で、自分は「夏の思い出」をどのように歌いたいのか、どう歌うべきなのかについて考察させた。その後、作曲者、作詞者のエピソード等を知り、全2時間から何を学んだのか、何をつかんだのか等を整理するため、その内容を記述、発表し、終結へ向かうという流れであった。

中学校 第 1 学年 題材指導計画(学習指導略案)

1 題材名 情景を思い浮かべながら歌おう

2 題材の目標

- (1) 歌詞が表す情景や曲の表情といったものに興味・関心をもち、「夏の思い出」に主体的に取り組む。
- (2) 言葉の抑揚と旋律との関わりを感じ取り、曲の特徴を生かした音楽表現をするために創意工夫する。
- (3) 全体の雰囲気を感じ取り、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な姿勢、日本語の発音、呼吸法などを身に付けて歌う。

[学習指導要領の指導事項との関連]

A (1) ア、歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと。

[共通事項] 旋律、速度、強弱

3 教材

- ①教科書・・・中学校教科書「音楽のおくりもの1」(教育出版) P.16～19
- ②ワークシート・・・学習活動を円滑にし、楽曲についての理解を深めるため、本ワークシートを用いる。
- ③聴取音源・・・教科書準拠CD

4 題材の評価規準

1 音楽への関心・意欲・態度	2 音楽表現の創意工夫	3 音楽表現の技能	4 鑑賞の能力
① 歌詞が表す情景や曲の表情といったものに興味・関心をもち、「夏の思い出」に主体的に取り組もうとしている。	① 言葉の抑揚と旋律との関わりを感じ取り、曲の特徴を生かした音楽表現をするために創意工夫している。	① 全体の雰囲気を感じ取り、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な姿勢、日本語の発音、呼吸法などを身に付けて歌おうとしている。	

5-1 第1時

(1)目標 歌詞が表す情景や曲の表情といったものに興味・関心をもち、「夏の思い出」に主体的に取り組む。

(2)展開

	生徒の活動 (時間)	○指導上の留意点等 ◆評価規準：評価方法
導入 展 開	1 学習内容を理解する。(5分) ・本時の内容を知る。	○本時の学習目標を黒板に掲示すると共に、授業の概要を説明する。
	2 範唱CDを1番から3番まで通して聴く。(5分) ・教科書の歌詞を目でたどりながら「夏の思い出」のCDを聴く。	○場所や場面を想像しながら聴くよう指示する。
	3 範唱CDを聴いた感想を述べる。	○感想内容について適宜板書する。 ◆視点1-①：観察
	4 1番から3番までの歌詞を読み、内容の把握をする。(15分) ・教師の音読に続いて歌詞を朗読し、詞の内容についての理解をする。	○難しい歌詞もあるため、生徒にはなるべくわかりやすい言葉で、説明する。 ○難しいと思う歌詞にはアンダーラインを引くよう指示する。
	5 1番から3番までを歌う。(20分) ・教師の範唱に続いて、1番から3番までを練習する。	○生徒の理解にあわせて、進め具合を判断する。 ○4小節～8小節程度で区切りながら徐々に曲の練習を進める。 ◆視点3-①：観察

まとめ	6 次回の学習内容を確認する。 (5分)	○本時の内容を簡潔にまとめて確認する。 ○次回の学習内容について、簡単に説明を行う。
-----	-------------------------	---

5-2 第2時

- (1)目標 ①言葉の抑揚と旋律との関わりを感じ取り、曲の特徴を生かした音楽表現をするために創意工夫する。
②全体の雰囲気を感じ取り、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な姿勢、日本語の発音、呼吸法などを身に付けて歌う。

(2)展開

	生徒の活動(時間)	○指導上の留意点等 ◆評価規準：評価方法
導 入	1 学習内容を理解する。(5分) ・本時の内容を知る。	○本時の学習目標を黒板に掲示すると共に、授業の概要を説明する。
展 開	2 範唱CDを1番から3番まで通して聴く。(5分) 3 楽曲、作曲者、作詞者について理解する。(20分) ・教科書P.16、17に掲載の内容を音読し、理解を深める。 4 1番から3番までの練習をする。(15分) ・全体で音取りをした後、楽譜に指示されている音楽記号等を理解しながら歌う。	○先週、学習した内容を振り返らせると共に、前時の感想等を述べさせる。 ○数人指名し、音読させる。 ○楽譜に示されている音楽記号などにもふれ、楽曲への知識を深めさせる。 ○生徒たちが慣れるまではピアノで旋律を弾き、なるべく短い小節に区切って繰り返し音取りをさせる。 ◆観点2-①：観察 ○楽譜に指示されている音楽記号等の読み方や意味について説明する。
ま と め	5 全2時間の感想を学習シートに記入し、感想等を述べる。 6 次回の学習内容を確認する。(5分)	○生徒が出した感想等を適宜板書し、全2時間の学習内容を振り返らせる。 ○本時の内容を簡潔に確認する。 ○次回の学習内容について少し触れておく。

資料1-2

ワークシート

情景を思い浮かべながら歌おう

年 組 番 名前 _____

夏の思い出

一

夏がくれば 思い出す
はるかな尾瀬 遠い空
雲のなかに うかびくる
やさしい影 野の小径
水芭蕉の花が 咲いている
夢みて 咲いている 水の辺り
石楠花に たなごれる
はるかな尾瀬 遠い空

二

夏がくれば 思い出す
はるかな尾瀬 野の終止
花のなかに そよよと
ゆれゆれる 舟も舟も
水芭蕉の花が におっている
夢みて 咲いている 水の辺り
まなこつばね 懐かしい
はるかな尾瀬 遠い空

○ CDを聴いた感想を書こう！

○ 全2時間の感想を書こう！

中学校 第 1 学年 題材指導計画(学習指導略案)

1 題材名 聴いたり視たり歌ったり、いろいろな角度から「夏の思い出」に取り組もう

2 題材の目標

- (1) 歌詞が表す情景や曲の表情といったものに興味・関心をもち、「夏の思い出」に主体的に取り組む。
- (2) 言葉の抑揚と旋律との関わりを感じ取り、考察した内容を生かした音楽表現をするために創意工夫する。
- (3) 全体の雰囲気を感じ取り、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な姿勢、日本語の発音、呼吸法などを身に付けて歌う。
- (4) 曲のもつ特質や雰囲気を感じ取り、様々な声質の歌唱のよさや美しさを見付けて聴く。

〔学習指導要領の指導事項との関連〕

- A (1) ア、歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと。
ウ、声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合わせて歌うこと。
 - B ア、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。
- 〔共通事項〕 音色、旋律、速度、強弱、構成

3 教材

- ①教科書・・・中学校教科書「音楽のおくりもの1」(教育出版) P.16～19
- ②ワークシート・・・学習活動を円滑にし、楽曲についての理解を深めるため、本ワークシートを用いる。
- ③聴取音源・・・「教科書準拠CD」、「四季をうたう」(N.M.G. record)、「歌いつく日本の歌」(ビクターエンタテインメント株式会社)

4 題材の評価規準

1 音楽への関心・意欲・態度	2 音楽表現の創意工夫	3 音楽表現の技能	4 鑑賞の能力
① 歌詞が表す情景や曲の表情といったものに興味・関心をもち、「夏の思い出」に主体的に取り組もうとしている。	① 言葉の抑揚と旋律との関わりを感じ取り、考察した内容を生かした音楽表現をするために創意工夫している。	① 全体の雰囲気を感じ取り、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な姿勢、日本語の発音、呼吸法などを身に付けて歌おうとしている。	① 曲のもつ特質や雰囲気を感じ取り、様々な声質の歌唱のよさや美しさを見付けて聴いている。

5-1 第1時

- (1) 目標 ①歌詞が表す情景や曲の表情といったものに興味・関心をもち、「夏の思い出」に主体的に取り組む。
②曲のもつ特質や雰囲気を感じ取り、様々な声質の歌唱のよさや美しさを見つけて聴く。

(2) 展開

	生徒の活動(時間)	○教師の働きかけ・支援 ◆評価規準：評価方法
課題の発見	1 自分にとっての、これまでの夏の思い出で印象に残っていることをワークシートに書き、発表する。(5分)	○自由に発言させる。
	2 A、B、C、スタイルの異なる「夏の思い出」を聴き、それぞれの雰囲気やよさを発見する。(25分) ・A、B、Cの順にCDを聴き、発見した内容をワークシートに記述し、感想等を述べる。	○授業概要の説明の後、タイトル名等、何も明かさずに3曲を聴かせる。 ○全体の雰囲気のほかにも歌っているアーティストや伴奏等の特徴についても着目するよう指示する。 ○感想内容について適宜板書する。 ◆観点4-①：観察・ワークシート

課題の探究	3 1番、2番を音読する。(10分)	○数人指名し、音読させた後、どのように音読すれば美しいかを生徒に考えさせる。
	4 1番を歌い、歌った感想等を述べる。(8分)	○主旋律を右手で弾き歌いややすくするなど、生徒の状況を見ながら進める。 ○歌っているとき、どのようなことを考えながら歌っていたか、何を思いながら歌っていたか等を質問する。 ◆観点1-①：観察
	5 次回の学習内容を理解する。(2分)	○次回の学習内容を簡潔に説明する。

5-2 第2時

- (1)目標 ①言葉の抑揚と旋律との関わりを感じ取り、考察した内容を生かした音楽表現をするために創意工夫する。
②全体の雰囲気を感じ取り、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な姿勢、日本語の発音、呼吸法などを身に付けて歌う。

(2)展開

	生徒の活動(時間)	○教師の働きかけ・支援 ◆評価規準：評価方法
課題の探究	1 学習内容を理解する。(3分)	○授業の概要を説明すると共に、先週学習した内容の感想等を述べさせる。
	2 1番、2番を通して歌う。	○前時の学習内容を思い出しながら歌うよう指示する。
	3 分かりづらい歌詞や疑問に思う歌詞をワークシートに書き出して確認し、意味を理解する。(15分)	○分かりづらい点、疑問に思う点等について、発言させると共に発言した生徒以外に意見を求め、できるだけ生徒どうして解決に向かえるよう、適宜アドバイス等を行う。 ○理解が深められるよう尾瀬の映像資料(DVD)を提示する。 ◆観点1-①：観察
	4 1番、2番を通して歌う。(5分)	○学習活動3を生かして歌えるようアドバイス等を行う。
	5 自分がどのように歌いたいのか、どのように歌うことがこの曲にとってふさわしいかを考え、ワークシートにまとめる。(15分)	○楽譜に指示されている音楽記号の位置や場所等が、なぜその位置にあるのか等を生徒に考えさせながら進行する。 ○音楽記号に着目し、作曲者にはどのような意図や思いがあるのかを考えさせる。 ◆観点3-①：観察・ワークシート
課題の解決	6 1番、2番を通して歌う。	○生徒の活動5での考察を生かして歌唱できるよう、適宜アドバイス等を行う。 ◆観点2-①：観察
	7 楽曲、作曲者、作詞者について理解する。(5分)	○作詞者、作曲者にまつわるエピソードについてもワークシートの内容を基に考えさせてみる。
	8 全2時間でどのようなことが勉強になったのかをワークシートに記入し、発表する。(5分)	○ワークシートに提示した3つの項目に以外にも書きたい内容があれば記述するよう指示する。
	9 次回の学習内容を確認する。(2分)	○次回の学習内容について少し触れておく。

資料2-2

ワークシート

聴いたり見たり歌ったり、いろいろな角度から「夏の思い出」に取り組みよう!

年 組 前 班組

課題!

夏といえば？ 海水浴？ スイカ？ 花火？ ラジオ体操？いろいろなことを思い出し、ほせんか？あなたにとって、印象深かった「夏の思い出」は？

☆歌ってみて、どんな感じがしたかな？

☆わからない言葉に線を引き、その言葉の意味を知ろう!

A	
B	
C	

☆「夏の思い出」に書いて、こんなエピソードがあるんだよ。

エピソード① 「夏の思い出」はラジオ体操のため！


エピソード② 作曲者の本田雅彦さんは結婚に行ったことがなかった！

エピソード③ 赤坂駅から電では戻らぬ611?

☆2時間の学習を通しての感想を書こう!

①どのような活動が楽しかったでしょうか、②どのようなことが勉強になりましたでしょうか、③どのようなことが印象に残りましたか、この3つの中から3つほど詳しく書いてください。

☆音楽記号の読み方と意味を確認してみよう!



☆どんな曲に歌ったらいだろう？どんな曲に歌いたいかな？曲に付け方をしよう!

☆「夏の思い出」に書いて、こんなエピソードがあるんだよ。

エピソード① 「夏の思い出」はラジオ体操のため！

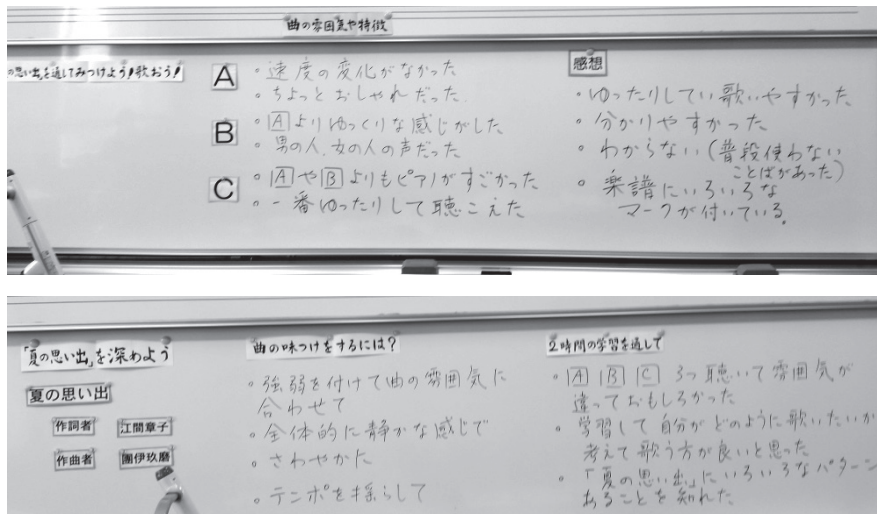
エピソード② 作曲者の本田雅彦さんは結婚に行ったことがなかった！

エピソード③ 赤坂駅から電では戻らぬ611?

☆2時間の学習を通しての感想を書こう!

①どのような活動が楽しかったでしょうか、②どのようなことが勉強になりましたでしょうか、③どのようなことが印象に残りましたか、この3つの中から3つほど詳しく書いてください。

資料3



資料4

尚美学園大学芸術情報学部
2016年度 音楽科教育法Ⅱ/資料

「夏の思い出」の授業を考察し、自身の計画に役立てよう！

学籍番号 _____ 氏名 _____

☆「夏の思い出」を教材として、Aパターン、Bパターン、2つの授業を体験しました。以下の項目について考察し、自身のこれからの模擬授業計画に役立てましょう。
「A・B」、「はい・いいえ」のどちらかに○を付け、その理由等を、できるだけ詳しく書いてみましょう。

- Aパターン、Bパターンの授業の違いはどのようなところでしたか？

- 小学校、中学校、高等学校で、あなたが受けてきた音楽の授業のパターンは、A、Bのどちらに近いものですか？〔 A ・ B 〕
- A、B、2つの授業を体験しましたが、これからの音楽科教員に求められる授業パターンはどちらだと思えますか？〔 A ・ B 〕
なぜそう思うのか？ _____
- A、B、どちらの授業が楽しかったですか？〔 A ・ B 〕
どのような点が？ _____
- Aパターン、Bパターン、生徒にとって、どちらのパターンが勉強になると思えますか？〔 A ・ B 〕
どのような点が？ _____
- Bパターンのような授業を行う場合、どのような計画や準備が必要だと思えますか？

- あなたはBパターンのような授業をしたいと思えますか？〔 はい ・ いいえ 〕
なぜそう思うのか？ _____
- 自由記述

4.2 模擬授業結果と考察

振り返りシートへの記述内容を表4にまとめた。ここでは、記述の集約から、Aパターン授業とBパターン授業について、それぞれの質問項目で、彼らがどのような感想や考えをもったのか、回答の中からポイントとなる語句をピックアップし概要を捉えることとした。集約に当たっては、原文を活字に起したが、同様の回答、似通った回答は割愛した。また、無回答、複数回答は集約数に含めないこととした。

質問項目1（AとBの授業の違いは？）の回答として、Aパターンの授業について「先生主導、教員目線、能動的」等の語句を含む回答が目立つ。そのほか、「楽しくない、教科書をなぞっているだけ、機械的、歌がメイン」といった回答もあった。いっぽう、Bパターンの授業に対しては「生徒が考えながら進む、生徒目線、生徒主体、生徒中心」等の語句のほか、「生徒が楽しく学べる、教科書をとびだして色々な視点から教材を、内容も深く、興味もてるような工夫、興味をひく」というよう回答が多い。このことから、「楽しい」、「興味もてる」といった要素が生徒の学習意欲を高める鍵となっていることが伺える。質問項目3（これから求められる授業のスタイル？）では、ほぼ全員がBパターンの授業に○を付け、その理由として「自分で考えて実行させる力、より深い学習、一つのことをどんどん広げ多くのことを、生徒主体の授業」等の語句を含む回答が多いほか、ここでもやはり「楽しい、楽しんで、興味・関心」といった語句が見られる。質問項目4（どちらが楽しかったか？）では、「自分で考える、色々なこと、色々な曲、色々なパターン、ワークシートを上手に、ワークシートが楽しい」等の語句を含む回答が目立つ。生徒が自らの手で積極的に内容を掘り下げて行くには、音源やワークシート等の吟味・検討が大切であるかを物語っている。質問項目5（どちらのパターンが勉強になるか？）では、少数ではあるものの、Aパターンの授業に賛同している回答があり、その理由として「知識が深まる気がする、内容によって先生主体の授業でもよいのでは」というものであった。このことについては考えさせられる点もあり、アクティブ・ラーニングと共に今後、研究していかなければならない課題と受けとめる。いっぽう、Bパターンの理由としては、「関心をもって深く学習、じっくり楽しく深められる、楽しみながら身に付く、積極的に学習に取り組める、楽しく勉強できて生徒も積極的に参加」といったものであった。質問項目6（どのような計画や準備が必要か？）では、「教材研究資料集め、色々な角度から教材研究する、色々なタイプの音源、掲示物、情報処理能力（パソコン）、技を真似る、先生側も色々な刺激を受ける必要」等の語句を含む回答がみられた。準備・計画については具体的な方法を考えている学生も多い。質問項目7（Bパターンのような授業をやりたいか？）は、ほぼ全員がBパターンを肯定しており、その理由として、「楽しい、楽しめる、楽しそう」といった語句を含む回答が多く、やはり「楽しい」「楽しめる」といった語句が回答に出てきていることを考えると、学習者にとって、アクティブ・ラーニング的な授業は「楽しい」、「楽しめる」ということも重要な要素であることが伺われる。他に「生徒の勉強になる、退屈しない、ワクワク感が出る、」といったものもあった。質問項目8（自由記述）では、Bパターン授業における準備の大変さに着目している感想が多い一方、「教材研究が楽しくなる、Bパターンの授業を作りたい」と前向きな感想を述べた学生がいることが分かった。本考察から、生徒と共に教員も楽しめるようなアクティブ・ラーニングの構築が必要ではないかということが推察できる。

表 4

1 Aパターン、Bパターンの授業の違いはどのようなところでしたか？

・生徒主体のパターンBに対して先生が進めていくのがAパターン。・Aは教師の言うとおりに進める授業に対してBは生徒が考えながら進む授業。・Aは生徒が授業を受けていて楽しくないと思った。Bは生徒が楽しく学べる授業だった。・AよりBの方が、音楽記号や歌詞など深く学習できる。Bは生徒がより興味をもてる授業だった。・Bの方がワークシート等から見てもヒントのようなものも多く、自分で考えるような(自分で考えやすい)内容になっている。・Aは教科書をなぞっているだけだったが、Bは教科書をとびだして色々な視点から教材を見ることができた。・Aパターンは歌唱中心に授業を行っていたがBパターンは「夏の思い出」を色々な視点から行っていた。・Aは教員目線、教科書通り。Bは生徒目線、工夫されている(ワークシート等)。・Aは先生主導な感じでBは生徒参加型な感じがする。能動的な授業。・Bの方がAよりも生徒の立場になって考えて授業を構成している感じがした。・Aはどちらかというと機械的。Bは生徒中心の授業だった。・Aは内容について軽く触れるだけ。Bは内容も深く触れワークシートも上手に活用している。・Aは特徴がない。Bは対象の曲に少しでも興味をもてるような工夫がされていた。・Aは簡潔、Bはじっくり。・Aパターンは、ただ書かされているだけ。Bは授業に対する興味が湧くし聴くことを楽しむことができる。・Aは教科書通りの進め方。Bは色々な角度からの授業。・Aは教師の一方的授業。Bは生徒主体。・Bの方は色々繋がっている。・Aは先生がすべて示していようだった。Bは生徒が考える場面が多かった。・Bパターンは生徒が考えることが多かった。Aは歌はうまくなると思うが、Bパターンは理解が深まると思った。・Aは歌うことが主眼、Bは情景などの部分も丁寧に扱っている。・生徒が教材について多角的に考えられるかどうかの問題。・Aは歌がメイン。Bは生徒の興味をひく授業だった。・Aは歌がメインの感じ、Bは生徒の興味をひく授業だった。・Aパターンは教師が引っ張ってくれるので歌いやすい。Bは楽しい授業だった。

2 小学校、中学校、高等学校で、あなたが受けてきた音楽の授業のパターンは、A、Bのどちらに近いものですか？

A 15 B 3

3 A、B、2つの授業を体験しましたが、これからの音楽科教員に求められる授業パターンはどちらだと思いますか？

A 1 B 20

○A回答理由・言葉の意味などをしっかり勉強できる。○B回答理由・生徒が考える授業の方が生徒もやる気が出ると思うから。・自分で考えて実行させる力を身につけさせていくべきだと思うから。・指導者としてただ楽曲を学ばせるのは誰でもできるけど音楽は興味が無い子もいると思うのでいかにその子たちを集中させ授業出来るかが必要。・生徒が飽きないよう、より深い学習ができることが大切だから。・生徒がより興味・関心をもって授業に取り組めるため。・Bの方が楽しく授業が受けられそう。・生徒に興味・関心をもたせるためにはBパターンの方がよいと思ったから。・生徒が楽しめなければ意味がない。・生徒が楽しいと思う。・Bの授業は1つのことをどどん広げ多くのことを教えることができるから。・機械的な授業だと音楽を楽しめない。・内容まで深く知ることができて生徒も楽しんで授業が出来る。・生徒に考えさせ書かせる、発表させる形が多い方がよいし、工夫した方が楽しい。・面白さと知識を得られぬが必要になってくる。・音楽は楽しんでするものだから。・音楽を聞くだけではなく見るという点からも理解させたい。・生徒主体に授業した方が生徒も楽しいと思ってくれる。・生徒が教材に積極的に取り組める。・自分で考えて歌うことは大切。楽しい授業でない生徒は興味をもたない。・歌うことだけが目的ではない。生徒の心を豊かにすることが大切。・生徒が授業に参加しやすい。・生徒主体の授業が大切。・生徒のイメージや情景を思い浮かべやすかった。

4 A、B、どちらの授業が楽しかったですか？

A 0 B 21

・自分で考えて発言できるから。・見たり聴いたり歌ったりと色々な角度から授業していたから。・自分で考えることが多い。・新しい発見が多かった。・歌唱を中心としつつも色々なことが学べた。・教科書に載っていないことをたくさん学べた。・色々な曲を聞いたから。・授業に飽きなかった。・固くない。・同じ曲を色々なパターンから聴き比べたのが楽しかった。・あまりガッチリしていないのが中学生向きでは。・ワークシートを上手に活用し深く知ることができた。・こういう授業、こんな視点もあるんだと思った。・生徒に考える力をつけられる。・たった1曲なのにたくさん曲を聴いたような感じがして飽きなかった。・ただ歌うだけでなく、音楽を視覚から得る情報とあわせてと理解できる。・色々なパターンの曲が聞けた。・最初の3曲の聴き比べがクイズのようになっていて楽しかった。・ワークシートが楽しい構成になっていた。・積極的に参加しやすかった。・自ら気づき工夫する楽しさ。・Bパターンの方が楽しく勉強できた。・聴き比べが楽しかった。

5 Aパターン、Bパターン、生徒にとって、どちらのパターンが勉強になると思いますか？

A 1 B 19

○A回答理由・Aパターンの方が知識が深まる気がする。○B回答理由・内容によっては先生主体の授業でやってもよいのではないかと。・興味をもって授業に取り組める。・生徒が関心をもって深く学習できるから。・自分で考えやすい。分かりやすい。・自分で考える部分が多い。・音楽に興味がない、苦手という生徒にも勉強になると思った。・生徒が考える機会が多い。・どちらのパターンも知識は付くと思う。Bはやる気の無い生徒にも身に付く。・Bの方が生徒の立場になって考えられており、Aよりも多くのことを学べる。ワークシートの量が多い割に楽しく取り組める。・楽しみながら身に付くのがBパターンだった。・じっくり楽しく深められる。・生徒の集中力が高められる。・Aはだんだん飽きてくる。・生徒自身が考えられる。・Bの方が考える力がつくと思った。・ワークシートを細かく書くことも大切。作業が多いと色々なものが身に付くと思う。・積極的に学習に取り組める。・生徒が主体的な方が記憶に残りやすい。・Bパターンの方が楽しく勉強できて生徒も積極的に参加してくれると思った。

6 Bパターンのような授業を行う場合、どのような計画や準備が必要だと思いますか？

・生徒の目線、生徒の反応に答えられるような細かい準備。・生徒の反応にも対応できるように授業の進め方の準備。・どのように授業するのかの事前調べ。・教科書以外の資料、情報処理能力(パソコン)、色々なタイプの音源、掲示物。・教材研究をたくさんすること。・上手な人の技を真似る。・色々な角度から教材を研究する。・多くのことを調べ、自分自身も勉強をたくさんしなければと思う。・生徒とクラスの雰囲気理解し、生徒が楽しめるための教材等の準備。・生徒により多く感じさせ考えさせられるような授業をつくること。・教材研究の際にユニークな作品にも目を向ける必要がある。先生側も色々な刺激を受ける必要がある。・時間をかけてじっくり案を練り、先生自身が受けてみたいと思うような授業内容を考えること。・授業の組立ての順序のようなものを大切にしたい。教材研究をしっかりと行う。・授業の順番やワークシート等の工夫が大切。・教材研究資料集め。・普段から色々な音楽を聴き、知識を増やしておく。・生徒が楽しんで授業を受けるにはどうしたら良いかをしっかりと考え、教師も曲についての知識を増やしておくことが重要。

7 あなたはBパターンのような授業をしたいと思いますか？

はい 21 | いいえ 0

・生徒が楽しめた方が、生徒が主体的に授業に取り組むと思う。・やる気の無い生徒でも楽しめそう。め生徒が楽しめるし、私もBパターンの方が楽しい。・教師も興味をもって楽しく学習できる。・生徒が意欲的に参加してくれそうだから。・Aパターンより楽しそうだから。・生徒の反応が良ければ教師も楽しい。・生徒にとって勉強になる。・多くのことを分かりやすく学ばせられるから。・授業をやっている方も楽しい。・生徒に興味をもたせられる楽しい授業を自分もやりたいから。・自分も楽しく進められると思う。・生徒が退屈しない。・準備が大変だと思うが、受けている方はBパターンの方が楽しい。・生徒により多く考えさせる授業の方がワクワク感が出る。・生徒に楽しいと思ってもらえるから。・準備は大変そうだけど、生徒に楽しんでもらえるし、せっかく授業をやるからには中身の濃いものになりたい。・内容を充実させることができる。・生徒がおもしろい！楽しい！と思えるような授業がよい。・生徒が笑顔で積極的に参加してくれると思った。

8 自由記述

・Bの方が楽しいけど毎回資料を用意したりするのが大変そう。Bは教師の柔軟な力や臨機応変に対応できる力が必要だと思う。・Bの方が良いのに進まないが毎回Bのような授業をしていたら大変なので、たまにはAをやってもいいと思う。・自分が作っていた指導案が急に面白くないもののように見えてきた。Bの方が生徒も楽しいし、自分も教材研究が楽しくなると感じた。・生徒に何をさせたいのが重要だと思った。Aのパターンも必要だと思う。・身近な中学生に何が楽しいのか聞いてみたりして研究する必要があると思った。・内容の濃いバリエーションのある授業をしようと思うとそれなりの準備が必要。・Bパターンの授業を作って見たいと思った。・生徒に気付かせる授業が大切だと思う。

5. 成果と課題

本稿「4.1 模擬授業企画及びその実際」を軸として研究を進めてきた。その結果、学習者は、教師主導型の授業よりも、自らが主体的に取り組めるような授業を多く望んでいるのではないかということが見えてきた。

しかし、何の支援やアドバイスもないままに、生徒たちが、「発見・探究・解決」といったスタイルの学習へ向かうことは難しい。やる気や根気といったものが、かなり必要となる「探究」段階で、生徒自身に深めることの楽しさを実感させるためには、発見段階で、生徒自らが、発見や見付けるといったことを楽しめるような教師の「仕掛け」「巧みな工夫」「演出」が重要となることも一定検証できたように思われる。生徒自らが「見付けることの楽しさ」や「発見の面白さ」を初期段階で十分味わえるか否かで次なる取組みの姿勢が大きく変わることも本研究から分かった。

具体的なアクティブ・ラーニングの方法を考えることは大切であるが、その前に、指導者のこれまでの授業スタイルや手法、授業の手順・流れといったもの、あるいは、年間指導計画やこれに伴う題材、教材の見直しといったことが必要となることが確認できた。今後、例えば、題材の設定等に当たって、「歌唱」と「創作」、「器楽」と「鑑賞」といったような音楽科における分野どうしの関連を図った取組みはもとより、「音楽と絵画」、「音楽と詩」、「音楽と戦国時代」等、他教科とのコラボレーションを考えてみることはできないだろうか。また、他ジャンルと関連した題材、例えば「音楽と舞踊」、「音楽と食」、「音楽作品と政治」、「音楽と服飾」、「音楽とジェンダー」等、枠を広げて考えてみることも大切と思われる。また、これらとは逆に、一人の人物を対象として様々な多角的から深く研究したり、一つの作品を違った角度から考察したりといったことは如何であろうか。

ほかにも、「グループエンカウンター」、「ディベート」、「ロールプレイ」、「ブレインストーミング」「KJ法」、「フィールドワーク」、「ケーススタディ」、等、発見段階から課題解決に至るまでの生徒たちの学習形態も時々に応じて考えなければならないし、これら様々な学習形態を、どのように提示したり、学習者に選択させたりするのか、また、「まとめ」段階における生徒たちの取組みの発信方法（発表、演奏、冊子作成等）のサポートや支援が、指導者により多く求められてくるだろう。また、教材や教具の開発、ICTの活用等、解決しなければならない具体的課題が多い。

しかし、以上述べたような事柄は、全く新しい取組みばかりというものでもなく、これまでの先達の実践や事例に見ることができるし、これらを礎とし、目の前にいる生徒の実態を見極めつつ、指導者の個性や持ち味といったものも加味し、生徒の主體的・協働的な学習を進めて行くことは楽しい営みであるとも考えられる。今後、具体的な題材、教材や教具、学習形態等について、筆者自身、継続研究を重ね、発信していきたい。

注

- 1) 調査項目、調査分析等は音楽教育実践ジャーナル (2016) vol.13 no.2 6～19頁。
- 2) 新山王政和、「音楽についてこう考える、こう言いたい」学習者アンケート調査分析－子供にとって音楽は「アイデンティティやコミュニケーションのツール」－ 音楽教育実践ジャーナル (2016) vol.13 no.2 9頁、日本音楽教育学会
- 3) 同上書、同頁
- 4) 21世紀型スキルについての解釈は多岐に渡るため、ここでは高須一の述べる「21世紀型スキルは、IT企業であるインテル社 (Intel Corporation) が21世紀を知識基盤社会ととらえ、今後のグローバル化に対応した子どもの育成のために必要となる学力を指定したものである。すなわち、課題発見能力、思考力・判断力による課題解決能力である。」と理解しておく。
高須一、「これからの学校教育が子どもに培うべき学力とは何か－21世紀型スキルを視点にした創造性の育成－」、音楽教育実践ジャーナル vol.13 no.1 7頁 (2015・日本音楽教育学会)
- 5) 同上書、8頁
- 6) 文部科学省国立教育政策研究所は平成21年より次期学習指導要領改訂のための基礎研究を既に始めており、平成26年3月までに7つの報告書をまとめている。誌面に限りがあるため内容記述等は控える。
- 7) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
(2017/01/12 アクセス)
- 8) 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm
(2017/01/12 アクセス)
- 9) 教育課程部会報告「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gai-you/1377051.htm
(2017/01/12 アクセス)
- 10) 松村麻利、「自己確立、自己学習能力を育成する－日本の音－創作」、教育音楽、中学／高校版、音楽之友社、1988年12月、47－49頁。藤池聡、「多様な音楽の中から自分が求める価値を見出す」、教育音楽、中学／高校版、音楽之友社、1993年11月、44－46頁
- 11) 同上書、1988年12月、49頁
- 12) 同上書、1993年11月、46頁

参考文献

- ・野村幸治、中山裕一郎編著、「音楽教育を読む」、1995年、音楽之友社
- ・重嶋博、「音楽授業の構造と展開－新しい学力観と基礎・基本の定着」、1995年、音楽之友社
- ・日本音楽教育学会編、「音楽教育学研究 2. 音楽教育の実践研究」、2000年、音楽之友社
- ・川池 聰、「小学校・中学校 新しい音楽科の指導と評価」、2003年、教育芸術社
- ・藤沢章彦、「中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック ポイントと事例」、2008年、教育芸術社
- ・日本音楽教育学会編、「日本音楽教育事典」、2004年、音楽之友社
- ・文部科学省、「小学校学習指導要領解説、音楽編」、2008年、教育芸術社
- ・文部科学省、「中学校学習指導要領解説、音楽編」、2008年、教育芸術社
- ・文部科学省、「高等学校学習指導要領解説、芸術（音楽 美術 工芸 書道）編」、2009年、教育出版
- ・教科用図書、「中学音楽 音楽のおくりもの1」（教育出版）、平成27年検定
- ・教科用図書、「中学生の音楽 2・3上」（教育芸術社）、平成27年検定
- ・「ひとりひとりが授業の主役」、教育音楽、中学／高校版、音楽之友社、1985年8月
- ・「子どもたちを引き込む授業」、教育音楽、中学／高校版、音楽之友社、1991年7月
- ・音楽教育ヴァン vol.26、2014年、教育芸術社
- ・季刊 音楽鑑賞教育 Vol.27 通巻531号、特集 音楽授業づくり「音楽科教育におけるアクティブ・ラーニング」、2016年10月、公益財団法人音楽鑑賞振興財団

